

日時：平成 26 年 8 月 23 日（土）

13:30～16:00

場所：足利市民プラザ 文化ホール

平成 26 年度

地方分権・地方自治フォーラム

地方分権・地方自治フォーラム 第1部 基調講演

○司会

では、第1部は基調講演となります。講師は新潟大学法学部の田村秀先生でございます。先生、どうぞご登壇ください。

基調講演に入ります前に、先生のご紹介をいたします。

田村先生は北海道のご出身で、東京大学工学部をご卒業後、自治省に入省されました。その後、国土庁や岐阜県、香川県、三重県で地方行政のご経験をされた後、東京大学大学院総合文化研究所助教授を経て、新潟大学法学部にお勤めでございます。現在は同大学法学部長・教授を務めていらっしゃいまして、ご専門の分野は、行政学、地方自治、公共政策、食によるまちづくりです。

著書には、『道州制で日本はこう変わる～都道府県がなくなる日～』『ランキングの罠』『暴走する地方自治』『改革派首長はなにを改革したのか』など、多数ございます。

本日は、「これまでの地方分権改革と今後の展望～『ご当地』ツールで地域を活かそう～」をテーマに講演いただきます。それでは先生、よろしく願いいたします。

テーマ「これまでの地方分権改革と今後の展望～『ご当地』ツールで地域を活かそう～」
講師 新潟大学法学部長・教授 田村 秀 氏

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました新潟大学の田村でございます。先ほどは知事さん、市長さんからご挨拶がございました。特に市長さんからは私の拙著についてご紹介いただきまして、本当に恐縮しております。

きょうは、私が最初に基調講演として1時間弱お話しさせていただきます。タイトルを見ると、分権のこととご当地ということで、ちぐはぐな感じかなと思われている方もいらっしゃるかもしれません。ただ、私にとってはそれについてはつながるところがあります。もっと言えば、地方分権というのは、地域に身近なところからいろいろな人たちが考え、地域をよくしていこうという営みではないか。先ほど改革派首長のことについて話がありました。大きな話も決して無駄ではないのですが、分権というのは住民生活をよくするためにやっていくものですから、やはり身近なところにもっと目を向けるべきではないかということで、今日はお話いたします。

お手元に私のレジュメ等があるかと思いますが、写真等もございますので、写真は付けておりませんが、こちらを見ていただきながら話を進めていきたいと思っております。

地方分権改革というのは、日常生活の中でわかりにくいものかと思っております。もちろんこの中の自治体職員の方などは、仕事を通じていろいろと考えることもあるかと思っております、そういうものについての評価について。

次に、改革派と言われる方々について私はかなり厳しいことを書いておりますので、家内から「あなた、いつ刺されるかわからないわよ。夜道には気をつけなさい」みたいなことを言われます。ただそこは、裏返しとして、多くの首長さん、多くの自治体職員は非常に頑張っているのだということを伝えたいということです。

さらに、そういう中で地方自治を深めるためにはどういうことが重要なのかということで、私自身は食によるまちづくりなどをいろいろやっておりますので、身近な視点から、もっと言えば、地域資源を活用した地域の活性化が地方分権、地域をよくする一つの切り口ではないかということをお話ししたいと思っております。

私がどんな人間かということを書いています。先ほどもご紹介いただきましたが、やじうま根性だけは負けないかなと。食べ物関係ではテレビやいろいろな本も書かせていただいておりますし、さまざまなデータリテラシーと言われる分野の研究もしております。この辺を詳しく説明してもいいのですが、時間もございませんので本題に入りたいと思っております。

皆さん方も新聞やいろいろなところで「地方分権」という言葉を聞いていると思っております。そういう流れがあり、都道府県や市町村がより重要な役割を担っているのだということは、何となくおわかりかと思っております。

この辺は少し教科書的なところではありますが、歴史を振り返ってみますと、国から地

方へ、できるだけ地方の自主性を活かした地域づくりを進めていこうというのは世界的な動きです。日本でも、1970年代から「地方の時代」という言葉を、神奈川県の前知事さんやいろいろな方がおっしゃっています。

そういう中で、1990年代に政権交代が起こって細川政権になりました。最近、細川さんがクローズアップされましたが、当時、知事や市長を経験した人が国の中枢にいたという偶然もあり、まさに1990年代に地方分権の動きが加速していきました。

今から14年前の2000年、地方分権一括法が通り、さまざまな動きが始まったわけです。

幾ら仕事の権限が来ても、お金がなければ何ともならないということもあって、三位一体の改革となりましたが、このあたりから、かなりの紆余曲折を経てというところもあります。

そして、栃木でもいろいろと市町村合併があったわけですが、1990年代当時、私は霞ヶ関にいましたので、国の議論や政権与党の議論などで、権限を国から地方に移してもいいけれど、本当に地方にはそれだけの人材などの受け皿があるのかということで、合併が進められてきたという経緯があります。

さらに、最近では「地域主権」という言葉なども語られる中で、多少問題提起のようなこともさせていただきたいと思います。

地方分権は、身近な問題を身近なところで決められるということですから、恐らく「それはだめです」という人は余りないと思います。その意味では総論賛成という人が多いと思います。問題は、どこまで分権すべきかです。別の言い方をすれば、国の果たすべき役割は何なのか、あるいは国が果たすべき役割は本当にあまりないのか、そういうところも気をつける必要があります。

さらに、2000年に地方分権一括法ができて14年経ちました。果たして市民生活にどのような変化があったかという、なかなかこれがわかりにくいと思っている方が結構いるのではないのでしょうか。あるいは、一部の首長さんの中には、「国から権限とお金が来れば全部解決する」ということを言う方もいますが、本当にそうだろうかという疑問もないわけではありません。

それをもうちょっときつい言い方をすると、例えば地方分権は常に“善”なのか、国や国の出先機関は悪いかばったくりバーだとか、いろいろなことをおっしゃる人がいますが、本当にそうなのか。あるいは、ルールの関係で全国一律というのはよくないというのですが、本当にそうでしょうか。経済活動をやっていく上ではルールを統一したほうがいいものもある、という見方もあります。

これは特に規制緩和がそうです。私は規制緩和ということについて若干消極的な人間です。大学にいていろいろ感じる場所があるのかもしれませんが、もちろん規制を緩めるべきことはいっぱいあると思いますが、他方で、安全・安心というところでどんどん規制を緩めて本当にいいのでしょうか。食に対する安全も、全部事後的にチェックすればいいとなったら、食の安全は守られないかもしれません。

4つ目の「首長は国会議員よりも“偉い”のか」は、入れて後悔しています。知事さんや市長さんがいる前で、喧嘩を売っているのかということになるかもしれませんが、首長の方が国会議員より偉いということを言う首長さんもいます。これは本当はどうなのか。

他方で、私も国にいた経験がありますが、国会議員は本当に権限縮小に積極的なのか。国の政党はほとんどみんな「分権、分権」と言うのですが、それは国会の権限を縮めることになりかねません。どこまで本気なのかがちょっと気になるところです。

さらに言うと、先ほどの規制緩和ともつながりますが、「市場原理主義」という言葉があります。これについては賛否いろいろあると思いますが、一方で、分権すれば世の中がよくなるみたいなことを言う人も、時々首長さんなどでいらっしやいます。それは何か分権原理主義的な感じですか。

もっと言いますと、全ての分野で権限を地方が受けるのか、それとも狭く浅くか。要は、特定のところについてより権限を任せるべきではないか。実は、これは考え方が人によって分かります。行政学では一番大物と言われている西尾先生という東大名誉教授がいらっしやいます。私も博士号をいただきました。あの方は後者で、私も全ての分野でというより、むしろ地方にとって一番大事なのはまちづくりの権限についてで、もっと声高く、しかも具体的に主張すべきではないかと思えます。

要は、国、県、市町村があるわけですが、うまく役割分担が行われてはじめて住民が安心して暮らせるのだと思えます。特に「安心」というところです。皆さん方も非常に心を痛められていると思えますが、広島市で大水害がありました。ああいうものを見てみると、例えば広島市と広島県の連携がうまくいっていたのだろうかという話もありますし、もっと言えば、先ほどの規制緩和ということではないですが、あんまりまで住宅開発するのかなど、後から考えると疑問になるようなところまで開発している。実は日本は開発に関しては緩いのです。農地転用などは厳しいですが、山地などは開発に関する規制は緩やかです。むしろ、自治体に規制する権限をもっと与えるべきではないか。いろいろな見方があると思えます。

もっと言えば、皆さん方からすると、「分権、分権」と言っているけれども、国と県と市町村という行政のコップの中の争いで、住民にはあまり関係ないとか、あるいは最近、西のほうでは、「〇〇都構想」など東京都の真似をするようなことがいろいろ出ています。これはちょっと難しい言葉で言うと「統治機構」ということになります。そういうものの形を変えれば、本当に世の中がよくなるのでしょうか。むしろ私は、具体的な政策で、国がやっているこの規制は皆さん方の生活のこういうところで不都合があるのだということを具体的に示していかないと、本当の分権はなかなか進まないのではないかと考えています。

そういう中で、やることがいろいろあるでしょう。合併の検証をするということもあるでしょう。他方で、今日この中にいらっしやるかもしれませんが、地方議会で最近いろいろなことをやらかしています。西のほうではテレビで泣いてしまったり、ちょっと情けない感じもします。もちろん議員さんの多くは非常に頑張っていると思いますが、本当に

議会がチェック機能を果たしているのだろうか。

あるいは、うまくいけば、自分たちは関係ないという形で、住民の多くがもしかすると「お任せ民主主義」になっているのではないか。

あるいは、元々地方分権というのは、国から地方へということと、官から民への規制緩和がセットになっていたのですが、これは常に一方向なのだろうか。むしろ、地方がやるべきでないことは国に返上するということがあってもいいのではないかということです。

私自身は、地方経済や地域のことが非常に気になっています。そういうところから、改革派首長がどうだったのだろうかということ、いろいろなところで見ています。

次に、改革派首長に対する評価です。世の中、改革が流行りです。私は、改革は常にだめだとは思いませんが、特に大学にいますと、改革の失敗をいっぱい見えています。

例えば、司法制度改革ではロースクールを各地にいっぱい作りましたが、残念ながら国立でもうちの大学の大学院も募集停止ですし、私立でもそういうところはいっぱいあります。弁護士を増やすということになったのですが、結局は、食えない弁護士が増えるという状況になっています。

あるいはもっと皆さんに身近な改革ですと、教育改革があります。教育は重要です。足利には足利学校がありますので、もっと教育の分野で発信すべき点があるのではないかという気もしますが、その中でも「ゆとり教育」はどこに行ってしまったのでしょうか。もうないですね。実は今年の18歳はゆとり最後世代と言われて、入試でもいろいろありました。

「改革」という言葉がすごく先走っていますが、常に正しいかという、それは言い切れない。既得権益とか抵抗勢力という言葉が出ていますが、しがらみがない人が本当にいるのかという気もしますし、改革派と言われている人が、ちょっとどうかなというところが少なからずあります。

もちろん、非常に評価すべき点も少なからずあります。情報公開などを武器に、さまざまな問題点を浮き彫りにしたということもあります。ほかの自治体がやっていないことを積極的に取り上げて実験を行ったという評価もあります。情報公開にしても、環境アセスメントにしても、みんな国に先駆けて自治体がやってきた。ただこれは、2000年の地方分権改革の前からやれることはいっぱいありました。どんどん新しいことに取り組んでいきました。政策評価などもそうです。

そういうことをいろいろ書いたのが、『暴走する地方自治』等です。これは参考までに。私の話は飛ばしますが、これは本の見出しを書いたものです。

一番下の「改革派首長の登場によって地域経済は好転したのか」ですが、調べてみると、面白いことがあります。皆さん方がワイドショーなどを見ると、元知事さんと言われるような人がコメンテーターをやったりしています。一般論ですが、確かに知事さんは全ての分野に長けているわけです。これは市長さんもそうだと思います。即ち、福祉の分野も理解しているし、インフラ整備もわかっているし、環境のこともわかっているし、教育のこ

ともわかっています。その意味では、有名な改革派と言われた知事さんが辞めた後にコメンテーターなどで出てきます。でも、そういう人たちのところは、多くの場合、地域経済はよくなったのだろうか調べてみると、あらあらという感じになるのですね。

そこで、次の、地方自治の深化に何が重要なのかということです。人気とりのポピュリズム的な方も増える中で、着実に成果を上げている自治体はいっぱいあります。派手なパフォーマンスがなくても地域の問題は解決できます。自治体の規模が小さくても輝いているところは幾らでもあります。

今日はあまり詳しくは紹介しませんが、徳島県の上勝町は 2,000 人の町ですが、おばあちゃんたちが葉っぱをとって、和食のつまということでビジネスになっています。あそこの町は単にそこで終わっていません。国を動かして、国にインターンシップの制度を作らせたりしています。それが一種の分権なり地域の主体性なのかなと思います。三重県多気町は後で紹介させていただきます。

何が言いたいかというと、「改革派」は意外と地域経済に貢献していない。威勢のいい知事さんがいた宮城県、長野県、鳥取県、高知県、こういうところは軒並み「……」です。

これに対して、埼玉県に上田さんという知事さんがいらっしゃいます。上田さんがあるところでインタビューされました。こういう改革派と言われる首長さんのことで「いくらトップが目立ったり、痛快な発言を繰り返しても、所詮は『コーラ』だ。牛乳のように栄養があるわけではない。気分爽快にはなるけれども、何も栄養にはならない。要は、地域に何もいい影響を与えていない」というようなことをおっしゃっています。これは本当に言い得て妙だという感じがいたします。

そこで、きょうは、私も栃木県でお話しさせていただくということで、最初に余り喧嘩を売ってもいけないのですが、栃木県は残念ながら、イメージ調査をすると余りよくないのです。全国のイメージ調査をすると、栃木県、群馬県、茨城県はきれいに 45、46、47 位と並んだりすることもあります。あれは私はひどいと思います。

ただ、一方で、本当の意味で地域をよくするための取組をよくやってきたのがこの地域ではないかと思えます。それが非常にわかりやすくデータで示されるのが、あくまで経済に限定されますが、一人当たりの県民所得です。私は 50 年ぐらいのスパンでずっと順位を見てきました。そうするとどうなるか。

これは、主な都道府県の一人当たりの県民所得順位です。北海道からいろいろ出ています。私は北海道出身です。北海道は、昔は県民所得が多かった。ある意味では、戦後の経済を支えたのは北海道でした。石炭だったり、いろいろな重工業だったりしました。でも今は、こんな順位です。宮城県も結構下がっています。東京はずっと 1 位です。

私も、実際に調べてみるまでは北関東がここまですごいとは思いませんでした。栃木県は、1950 年から 1960 年には 30 位前後でした。それがぐっと上がってきました。2000 年くらいは足踏みをしています、さらにまた上がって 2010 年には 6 位です。47 都道府県で 6 番目に所得が高い。もちろんこれには法人所得なども入っています。茨城県も結構上がっ

ていますし、群馬県はそこそこです。あと上がっているのは山梨県や静岡県です。

このように、しっかりとした地域経営をやっているところ、それをいろいろな形で上手に次の首長にバトンタッチし、またそこで自治体職員や地域の経済界の方々がしっかりやってきたところは、確かにイメージ調査では余り評価されていないかもしれませんが、非常に高い伸びを示しています。皆さん方はそうなのかなと思われるかもしれませんが、これは外から見て高く評価できることだと思います。

一方で、じりじりと下がっているところも幾つかあります。秋田県などは、人口の減り方も激しいですが、非常に厳しい状況になっています。鳥取県も上がったたり下がったりしています。片山さんという私の役所の先輩の知事さんもいろいろと景気のいいことをいっぱいおっしゃっていましたが、経済に関してはぐっと下がってきました。

ニュースキャスターの話をしましたが、高知県知事だった橋本大二郎さんですが、結局ジリ貧になって、下から2番目くらいにまで落ちています。

その意味では、上田知事が言った「コーラ」というのはまさにそうだなと思います。そういうものがこのデータから明らかになるかと思います。

これは1960年と50年後の2010年にどうなっているかという順位比較です。80年代の平均と2010年の平均と、出てくる県は違いますが、茨城県、栃木県はほぼ同じくらいで上位です。あとは山梨県です。徳島県や福井県は余り目立った感じはしません。下がっているのは、鳥取県や北海道、長野県などです。結局、脱ダム宣言とか脱何とかと言ったのが、結局経済に関してはうまくいっていません。熊本県も、細川さんが終わったらだめになってしまいました。

いろいろ見方はありますが、改革派と呼ばれた知事のいたところは下がっています。全てではなく、三重県などは上がっていますが、これは恐らくシャープの誘致があると思います。しかし、三重県には三重県のいろいろな課題がございます。

もちろん、一人当たりの県民所得だけで比較するのは無理があるかもしれませんが、ただ、地域経済がある程度安定してはじめて県民生活や市民生活が安定するわけです。ここところはもっと重視されてしかるべきではないかと思います。

私もいろいろな自治体を見ています。きのうの職員研修でもいろいろと話をさせていただきましたが、行政も結局組織ですから、コミュニケーションができていない組織とできていない組織はやはり違う。改革派首長と言われる人たちは、トップダウンでマスコミに突然言ったりして、事務方があわててしまうということがあります。そんな話は聞いていなかったということもぼんと言ってしまうところがあります。実際にうまくやっているところ、地味でありながら着実に成果を上げているところは、コミュニケーションがきちりとなされているという共通項がございます。

これは、ある意味では行政と住民の関係もそうです。行政と住民のコミュニケーションがとれているかとれていないかは重要です。同じように、組織の中でも、トップと職員のコミュニケーションがしっかりとれているかどうかは、実は地方自治を深める上で必需品

ではないかと思います。

実際に企業を見ればそうです。元気な企業を見れば明らかですが、社員を悪者にするような企業はだめです。普通は、怒っても叱咤激励してうまく働かせるのが有能な社長です。どこか西のほうの首長さんみたいに、常に市の職員を悪者にするようなやり方では、どんどん人は仕事をしなくなります。これは企業もいろいろな組織を見ても共通だと思いますが、結果的に組織の中でコミュニケーションがうまくとれているところが、地域に様々なプラスをもたらしているのではないのでしょうか。

本当は前半の話は余りしたくなかった。ここから始めたかったのです。実際にここから始める講演も多いです。

私のスタンスは、もちろん分権は大事ですが、まずは地域をいかによくするかです。よくするというのは抽象的ですが、結論から言いますと、地域にはいろいろな宝がありますが、それが十分輝いていない。それを輝かすにはどうすればいいか。そのときに、国のさまざまな規制や財源的なしわ寄せがあれば、それをどんどん言えばいいと思います。最初から対立軸をつくって、国が悪いとか権力が悪いみたいなことを言う首長さんは、長い目で見ると地域にプラスにならないのではないかというのが私自身の思いであります。

そうであるならば、地域のさまざまな資源、私の場合は特に「食」を中心にやっていますが、ご当地グルメなどの地域資源を活用した活性化はどうあるべきか、少し具体的な話をしたいと思います。

私もいろいろなまちづくりの取組を見えています。それなりに成功したケースもありますが、ハード主体のものは余りうまくいきません。箱物ばかり作ってうまくいったケースは余りありません。大事なのは魂でありソフト、中身なのです。ふるさと創生1億円事業とかリゾート法とか、1980年代、1990年代にはいろいろなことで国も後押ししました。結果的に栃木にはそういうものはなかったかもしれませんが、全国各地にテーマパークがいっぱいできました。もちろんディズニーランドやユニバーサルスタジオジャパンは流行っています。あれは純然たる民間がやっていますが、第三セクターでやった岡山のチボリ公園。ハウステンボスは失敗してまた再生しています。あるいは北海道の芦別カナディアンワールド。さらに有名なところでは、夕張市の破綻の一端は観光事業の失敗です。皆さん方は聞いたことがないかもしれませんが、新潟にはトルコ村やロシア村がありました。全部ありません。全部失敗しています。

こういうものを見てみますと、ないものねだりで奇抜なものをつくってもうまくいかないのです。地域の素材が大事です。先ほどの上勝町みたいな話です。

食の話にだんだん入っていきませんが、外から人を呼び寄せるのは大事なことです。特に、人口が減っている中で交流人口を高める。観光だけではなく、広い意味の交流人口です。そういうものを考えるときに、食べ物は重要なツールになります。なぜなら、食べ物のネタが嫌いな人はあまりいません。例えば、「俺はスポーツはやらない」「私は書道はわからない」と言っても、食べ物のことは1日3回、人によっては4回かもしれませんが、食べ

ますから、みんな話題にできます。豊かな自然とか貴重な文化遺産はあるに越したことはないですが、そういうものがなくても、人を引き付ける食べ物があればそれなりに外から人が来るということで、食によるまちづくりを標榜する自治体が増えてきました。

新潟でも、毎週ではないのですが、地元のテレビが、食で新潟を元気にみたいなことをやっています。私も時々出させてもらっています。

時間もありませんので、2つほどご当地グルメについてお話しします。元々、日本の食は非常にバラエティに富んでいます。その中で、あるもので有名ということがあります。佐野であれば「佐野ラーメン」が有名ですし、宇都宮であれば「宇都宮餃子」など、いろいろあります。そういうご当地グルメを出す店が多いということでマスコミが注目し、いろいろなイベントが開催され、またそういうものが地域に一定の経済効果をもたらしているということがいろいろなところで出ているわけです。

6年くらい前になりますが、私は『B級グルメが地方を救う』という本を書きました。そのころはよかったのですが、最近は余り「B級グルメ」という言葉を使わないようにしています。「B級」というのは決して悪い意味で使ったわけではないし、私以外の人も使っていますが、「B級」というと安っぽいとかジャンクフードみたいなイメージを持たれて、余りそういう言葉を使ってくれるなど叱られることもありますので、できるだけ最近「ご当地グルメ」という言い方をしようと思っています。新しく作ったものもあれば、掘り起こしたものもあります。

実際にいろいろなところの写真を見てもらいますが、例えば讃岐うどんは香川県が有名です。もちろんこの界限にも結構うどんや蕎麦はありますが、なぜここまで讃岐うどんがメジャーになったか。実はそれはここ十数年のことです。これは地方の店でも並ぶのですが、食によるまちおこしという意味でヒントになります。

きょうはあまり詳しく言う時間はありませんが、「見える化」「見せる化」しているのです。例えば、おばちゃんたちが作っているのが見える。あとはお客さん参加型です。セルフサービスは究極の手抜きうどんと言われていますが、自分で湯を沸かせたり、自分でトッピングさせます。手を抜いている。でもそれがコストダウンにつながっています。市町村参加ではないですが、お客さんも参加するところが、実は讃岐うどんの魅力の一つでもあります。

ということで、100%地のものでなくてもいい。香川県のうどんの小麦はオーストラリア産が多いですが、ネギはどう考えても中国産ではなくその辺の畑からとってきたものだという事は明らかです。そういうところにこだわりを持ちつつ地域の素材を活かすのが、香川の讃岐うどんの典型例だと思います。

こういう製麺所みたいなところには、主みたいなおばちゃんがいて、これからうどんの生地が刻まれていくのを見ることができます。こういうものが魅力かと思います。

あるいは、B-1グランプリの話の後でしますが、富士宮焼きそばは意外に駄菓子屋さんみたいなところが有名で、おばちゃんがやっていたりしています。

私自身は3年、4年とB-1グランプリの特別審査員として参加しています。このイベントは食のイベントと思われていますが、実は違います。まちおこしのイベントで、まちを元気にするためにやっているのです。今は退会する団体もいたりして、新たな局面にきています。要は、まちおこしでは、地域をよくするためにいかにいろいろな人が参加するかです。自治体職員だけでも駄目ですし、JAだけでも駄目かもしれない。商工会議所だけでも駄目でしょう。いろいろな人が加わっています。

これは、北九州で一昨年やったときの写真です。前夜祭に商店街を練り歩いたり、結構賑やかでした。実際に2日間で60万人くらいが集まっています。あとは、イベント会場だけではなくて周辺の商店街でも使えるような食券にしたり、いろいろな工夫をしています。こういうキャラクターなども、いろいろ登場しています。

昨年のお話です。昨年は愛知県豊川市で行いました。被災した方がみんな避難しているわけですが、福島の浪江町の団体がゴールドグランプリ、シルバーに輝いたのは十和田の団体ですし、ブロンズに輝いたのは千葉県の勝浦と、みんな小さな団体が頑張っています。ことしは10月の第3週に福島県郡山市で行われます。郡山には加盟団体がないのですが、浪江町を応援するというのでやっています。栃木県に加盟団体がないのは残念ですが、無理にB-1グランプリにこだわる必要はないと思います。食によるまちおこしのアプローチはさまざまですし、栃木らしいやり方で盛り上げることが大事です。いろいろな地域おこしやまちおこし、その意味では地方分権もそうですが、「らしさ」を大事にするのが地方分権ではないでしょうか。地方のよさは「らしさ」です。栃木県らしさ、足利市らしさです。「らしさ」を愛することがまちおこしであり地方分権だと思いますが、画一的な考えが時々見られる気がいたします。

これは昨年の開会式で、各団体ののぼりなどが揚がっています。大盛況で、みんな楽しみながらやっています。

2つ目の事例です。きのう足利市の職員研修をやったときに、ほとんどの人が三重県多気町という地名を知りませんでした。だけど「高校生レストラン」と言われると、「ああ、あれか、テレビで見た」ということになります。これはある意味、究極のまちおこしです。なぜ高校生がレストランなのか。要は相可高校の調理学科のサークル活動みたいなものなのですが、それを通じて人材育成をし、地域の情報発信になっています。これといった観光資源があるわけでもない伊勢市の隣町が全国の注目を集めました。まちづくりの基本をしっかりと押さえています。地域の資源、人、やる気があるかどうかということです。

元々は直売所があり、直売所が「おばあちゃんの店」という言い方なので、高校生が出店するときに、最初はおでんとかうどんを出すものでしたが、おばあちゃんの店だから「まごの店」だと。いろいろなふうに進展します。すごいと思うのは、分権もそうだと思いますが、波及するかどうかです。先ほどの上勝町もそうでしたが、ほかの自治体を巻き込んでインターンシップを国に働きかけた。これも成果の一つだと思います。

高校生レストランでは、一つは、ほかの高校生にも刺激を与えたのです。調理クラブの

連中が頑張っているのだからと、ほかの学科の子どもたちも頑張って、ハンドクリームやジェルを化粧品会社と連携して作りました。特にリップクリームはメンソレータムの近江兄弟社と一緒に作りました。これは高校の中の話です。

さらに、これを参考に、潰れそうになった北海道三笠市の道立高校を市立高校にするのですが、そこを多気町の高校のようにしたいということでアドバイスをもらい、今、開校して2年目か3年目。頑張っているところです。

本当はこの話をするだけで1時間くらいかかってしまうのですが、かいつまんで言います。やはり、工夫をする知恵者がいるんだなと思います。レストランの建物自体はちょっとしたレジャー施設のところにありますが、実はこの建物は高校生が設計しました。県内の高校生にコンペを出して、工業高校の学生たちが考えた。高校生のために高校生が頑張った。高校は県立高校ですから、小さな町が県の教育委員会を動かしてできたということです。

「まごの店」と書いてあります。私が行ったのは2、3年前です。当然土日しかやっていません。平日にやっているわけではないのですが、いろいろな定食があって、高校生が中の調理と外のサービスを2週間交代でやっています。

ここの調理クラブに入ると、有名な料亭から青田買いされるのです。1年前からそれこそ就職が決まるということで、越境入学もあり、みんなここに入りたいとレベルが上がっているという話もあります。

あまりさえない天然パーマのおじさんは岸川さんといいます。この人がドラマ『高校生レストラン』になると、岸川さんを『海猿』の主人公をやった伊藤英明さんが演じて格好よくなってしまっているのですが、この人がまさに役場の仕掛け人です。

OB、OGの店も展開しています。

スーパーに行くと相可高校の出汁巻き卵を売っています。そういうことでちゃんと地域につなげることが地域づくりです。何かやろうとしたときに、制約がある、うまくいかない、国のまさに岩盤規制があつたり、国のお金の面でいろいろな不都合があつたりします。それを解決することは住民も支持してくれると思います。こういう積み上げが、実は本当の意味での分権につながっていくのではないかと。住民が理解する分権というものにつながっていくのではないかと思います。このような形でいろいろなものが商品化されているということです。

駆け足で話をしてきましたが、まとめのところは少し丁寧に話をしようと思います。

今まで言ってきたことの繰り返しにしかないわけですが、「分権、分権」ということで地方分権が本当の意味でクローズアップされて20年、細川政権のころからいけば20年ですし、1980年代からいけば30年です。

1980年代のときの有名なキャッチコピーではありませんが、なぜ分権が必要かというときに使われたのは、「その辺にあるバス停を10m動かすにも運輸省の許可が必要だ。そんなものは地元任せにすべきではないか」ということです。ある意味でわかりやすい事例があ

ったわけです。最近も、6団体や分権本部がいろいろなパンフレットを出しています。今日も配られていると思いますが、ちょっとわかりにくいと感じます。もちろんそれは私が理解していないのかもしれませんが、プレゼンの仕方の問題があるのかもしれませんが。

分権云々よりまず考えることは、地域を元気にすること。これが基本自治の基本ではないかと思います。ただこれは簡単なようで簡単ではない。特に地域や住民はいろいろな考えがあります。そういう中でいかに合意を形成するか。本当に首長さんは大変だと思います。それを一気に解決しようとして無用な対立をあおるような人は、ちょっとどうかという感じがいたします。

今の政権でも「地域の創生」とか「地方の創生」ということが時代のキーワードになっています。人口減少社会が本格化して消滅する町や村が出てくるみたいな言い方がされます。そういう中でいかに地域の元気さを出していくか。地域の元気さを出すために、何か問題があれば、国に対してどんどん「それはこういう規制があるから地域が元気になれない」と、より具体的に問題提起をすべきだと思います。そのときに、先ほど言った無用な対立があると、例えば議会が悪いとか国の出先機関が悪いと言うことは、ある意味ではわかりやすいかもしれませんが、結果的に本当に地域がよくなるのでしょうか。自分は評価されるかもしれないけれども地域の問題の解決にはつながっていない、ということがあるのではないかと思います。

そういうことではなく、楽しく、いい意味でライバルと切磋琢磨しながらまちづくりをする。実は、食によるまちおこしをやっているところは大体こういう考え方です。いろいろな団体はライバルでもあるのですが、そこ情報交換しながら、いかに地域を活性化させていくか、元気にしていくか、そういうところで皆さん努力されています。私がそういう団体を見ると、本当にいろいろ考えるところがあります。もちろん中には市の職員が中心になった団体もあれば、JAや商工会議所のOBが頑張っているところもあります。いろいろなケースがあります。議員さんが一個人で食によるまちおこしの団体に参加している場合もあります。さまざまな方が、自分のやれることを分担しながら、楽しくやる。

まちづくりというのははっきり言って厳しいと思います。後半でも話が出るかもしれませんが、私は昨日、今日と足利のまちを見て、いいところがいっぱいある反面、厳しいところもいっぱいあるなと思いました。いわゆるシャッター通りといった問題も含めてあるわけです。だからといって、眉間にしわを寄せてやってもだれも応援してくれない。楽しくやっていると、自分たちもそこに参加しようかなという気になるのです。その意味でも、できるだけ楽しくやることも大事です。

実際に、ご当地グルメのネーミングを見ても、結構面白いものが多い。ふざけた名前と思うかもしれませんが、言葉遊びをしたりしています。実際にゆるキャラを使うのはそういうことです。ゆるキャラを使うことが全ていいかどうか議論はあるかもしれませんが、そういうところでみんなの気分がリラックスしますし、大人から子どもまでなじむことができます。

ということで、さまざまなご当地ものを上手に活用する。これはある意味で「ご当地の底力」だと思います。昔、NHKで『ご近所の底力』という番組がありました。そのパクリで、私は『ご当地の底力』という本を出したいと画策しているのですが、ご当地・ご当地ものというのはまだまだ輝けるのではないかと。そして、そういうものから地域づくりなり分権の突破口が開けてくるのではないかと思ったりしています。

最後に、今まで余り触れなかった「都市政策」という話にちょっとだけ触れて終わりにしたいと思います。

選択と集中の時代とよく言います。いろいろな都市が栄えたり衰退したり、古今東西いろいろなことがあるわけですが、どんなまちを見ても必ず共通項があります。過去を上手に活かしたまちは輝いています。過去を否定して輝いたまちは、大都市を除いてまずありません。新しいものばかり追いかけたら、5年はいいかもしれないけれど、20年、30年、あるいは50年、100年を考えたら、そういうところは本当に見捨てられてしまうのではないかとというのが、いろいろな国、いろいろな日本の都市を見た中での私なりの感想です。

ここは新潟ではないので新潟の悪口はさんざん言えると思って来ましたが。実は新潟でも悪口を言っているのですが。私に言わせると、新潟市ははっきり言ってだめなまちです。全部古いものを否定しました。掘割は捨てた。路面電車も1990年代末に捨てた。そういうものを使おうとせずに、新しく2連のバスをつくるとか、ファッションビルも、笑いましたけど、ラフォーレ原宿新潟というのがあります。ラフォーレ原宿といったら東京です。東京追っかけの典型で、新しいものばかり追いかけている。これは行政に限らずです。

長岡市。全国市長会の会長でもあります。長岡市は郊外型だったのですが、今全部中心に戻しています。市役所を戻しました。いろいろな施設を戻しました。徐々にではありますが、長岡は輝いてきています。私は時々、長岡の関係者に「50年後は長岡は県庁所在地だね。それくらいの勢いで頑張ってくださいね。地理的にも新潟に比べれば真ん中ですから」みたいなことを言っています。

そういうことを見ると、過去を上手に活かすことです。そこで何が必要か。実はこれは分権と若干重なったり重ならなかったりするのですが、まちづくりには都市計画の制度がいろいろあります。都市計画法とか区画整理とか。もちろんそれらの制度にいろいろな問題・課題があるのも事実ですが、実際に輝いているまちや過去を上手に活かしたまちは大体みんな、1970年代、80年代を含めて都市計画の制度を利用し、あるいはそれにいろいろ提案していったところが輝いているのです。比較的近くですと松本市や金沢市、高山市、川越市、長浜市です。いわゆる伝統的建造物とかいろいろなほかの制度も含めてです。

そういうことからすると、栃木県にもいろいろと市町村があるわけですが、特に足利市や栃木市には大きな可能性があるのではないかと。いろいろ大変だと思います。この辺では群馬の桐生も大変だと思いますが、ちゃんとした歴史があります。もちろん歴史にとらわれすぎているという言い方はあるかもしれませんが、過去を上手に未来に活かしていくという発想が、地域づくり、まちづくり、そして分権というものに進んでいくのではないかと。

その中で、食などさまざまな要素をうまく盛り合わせていくことで、外の人間から見て輝くまち、魅力のある地域になるのではないかと考えております。

これが基調講演としてよかったかどうかはわかりませんが、後半のパネルディスカッションで、さらに具体的な話を知事さん、市長さんにお伺いしながら、ぜひ皆さんと地方分権・地方自治を考えていければと思います。ご清聴ありがとうございました。